おひさま通信

障害の程度は軽いけれども抱えている困りごとはとても大きい仲間への支援

白岡市障害者デイサービスセンター

はじめに

白岡デイサービスには、障害者手帳に基づくと軽度と言われる仲間が多くいます。生活動作における自立度が高かったり、言葉でのコミュニケーションが可能であったりします。過去には、一般就労していた仲間もいます。一見すると、自分で生活を切り開いていけるように見えますが、実は多くの困難を抱えています。今回は、そんな仲間への支援を考えたいと思います。

Aさんは60代の女性、療育手帳はBで、言葉でのコミュニケーションも可能です。学校卒業後の約20年間は一般就労をしていましたが、退職後はずっと在宅生活が続き、通う場所を探す中で2年前に白岡デイサービスに繋がりました。障害者手帳を取得したのは、ちょうどその時です。

通い始めた頃のAさん

当初は初めての場所や人間関係ということもあり、職員はまずは側にいて声を掛けるようにしました。そして、作業で行っているシャーペンの組み立てに誘ってみると「やってみる」と言い、意欲的に行います。手先が器用で、すぐに全ての工程が出来るようになりました。また、お花の水やりをお願いするとすぐに行い、「いつでも言ってね」と言ってくれます。どの場面においても「ありがとう」と伝えると、嬉しそうな表情をしていました。一方で、他の仲間にも役割があるので、昨日できた工程や水やりが今日も出来るとは限りません。そんな時は、どこか寂しい気な表情になりますが、「分かりました」と言って折り合いをつけ他の仲間に譲ってくれます。

そんなAさんの様子から、職員は「自分ひとりで何でも出来る人」、「伝えれば理解をしてくれる人」、「大きな困難は抱えていない人」といった印象を抱きました。そして、「白岡デイサービスの中で、家族以外の人を大切にし、される関係性が育まれるといいなぁ」と思っていました。

Aさんの変化

職員は、Aさんが自分で考え見通しを持ち頑張ることなどを通じて、肯定感や関係性などが育まれることを願い大切にしました。しかし、職員の思いとは裏腹に、「ひとりだと何も出来ない」といった様子が見られ始めます。

シャーペン作業では、毎回職員に「どの工程をやればいい？」と聞いてきます。「やりたい工程はある？」と聞いても、「○○がしたい」とは言いません。選択肢を用意しても選べません。最終的には、職員が「○○をやってね」とお願いするかたちで作業が始まります。作業以外では、お花の水やりが役割になりましたが、水を1回1回あげるごとに「これでいいの？」、「一緒にやってほしい」、「見てほしい」と言います。

そんな中でも、「職員と話をしたい」という思いが強くなります。話す内容は「よく分からないけど不安」や「ひとりになると寂しくなる」といった漠然とした思いがほとんどで、具体的な話はありません。職員は、時間がある時はそんな話を聴くようにしますが、話しても話しても満足には繋がりません。

Aさんのどこか底なしのような状態に、職員は「何でだろう」、「本当は出来るはずなのに」、「何だかやりきれないなぁ…」という思いになっていきました。そして、もう一度Aさんを深く理解するために、これまでの生活歴に視点を当てて考えることにしました。

生活歴を想像する

Aさんの家庭環境は、高齢で認知症のある母親と、あまり関係のよくない兄弟との暮らしでした。兄弟から話を聞くことはできなかったため、職員がAさんの生活歴を知る手立ては本人から話を聞くしかありませんでした。

Aさんは「働いてきたけどいじめられることがたくさんあった」、「自分のことを誰にも分かってもらえなくて辛かった」、「家にいる時はやることがなくて困っていた」などと話してくれますが、時系列なども合っていなく本当のところはよく分かりません。職員は、現在の様子と繋ぎ

合わせながら想像するしかありませんでした。

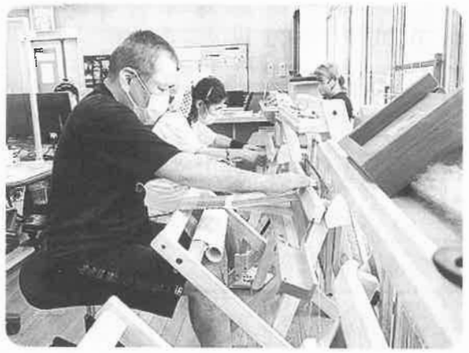
前述の通り、Aさんが障害者手帳を取得したのは2年前です。それまでは、障害が理解されなかったのではないか。周りの無理解に対して、Aさんはできるように、分かるように、といった努力をしたけれども報われず、否定ばかりされてきたのではないか。そもそも、他者から「分かったよ」と言ってもらえる経験が圧倒的に少なく、そんな中で「あーしろ」「こーしろ」と言われ、させられるばかりの人生だったのではないか。

きっと、そんな背景があって現在の自分で決められなかったり、「私を見て見て、評価して」という姿であったり、漠然とした不安を抱えるような姿に繋がっているのかも知れない。

職員は、やっとAさんの抱えている「できることは多いけど分かることは少ない」といった困難に気づきます。また、これまでAさんの行為や会話などできることに引きずられて多くのことを見落としていたこと、生活歴を辿ることで、初めて困りごとが明らかになってくることなどに気づきます。

改めて支援を考える

職員は、これまでの「ひとりで頑張る」から、「職員と一緒にする」という支援を大切にしていきました。



シャーペン作業では、「今日はこれをやってみよう」と言って一緒に工程を選んだり、組み立てができあがっていく過程を共感したり、最終的に作り上げた時には「こんなに上手にできたね」と言って成果を共有しました。お花の水やりでも、一緒に行いながら土の状態や花の育ちを確認し、咲いた時には「きれいに咲いたね」と言って喜び合いました。

また、Aさんからの「○○したい」という発信には、まずは「分かったよ」と言って応えることにしました。そして、職員と「話をしたい」という思いには、決まった時間を作り、例え短い時間であっても毎日Aさんからの話を聞きました。

Aさんの「やりたい」という思い

今、Aさんは作業の工程を自分で決めて行っています。時には、明日を見通して「今日のうちに○○をやっておこう」と考えて行っています。水やりでも、1週間の天気などを考えながら行っています。そんな姿からは、作業や水やりを「やりたい」という思いが感じられます。

また、他者への関心も広がり、他の仲間が行っているさをりを「私もやってみたい」と言い、活動の1つになっています。

「私を見て見て、評価して」といった姿も、以前ほどではなくなりました。背景には、共感など通じて自分のやりたいことが分かったこと、それができていることでの肯定感、自分が理解されていることでの安心感などがあるのだと思います。

理解者のひとりになる

白岡デイサービスには、特別支援学校を卒業して次のライフステージの場として通所を始める仲間はひとりもいません。Aさんのように長年にわたって障害が理解されずにたくさん否定されてきた中で意欲や興味などをなくしてしまったり、精神障害を発症してしまった人。必要な時に適切な社会資源と繋がれず、何年もの間ひきこもっていた人。そもそも人から大切にされた経験がないゆえに、自分や他者を大切にできないといった人間関係の困難さを抱えている人。どの人もこれまでの生活歴の中で不適切な支援や環境の中で年齢を重ねてきた結果、障害像が複雑化した人たちです。

そんな仲間たちは、障害の程度は軽いけれども抱えている困りごとはとても大きく、その1番は「自分について理解されにくいこと」だと思います。

人は誰でも自分のことを理解してくれる人がひとりでもいれば安心して生活できますし、そこから関係性が生まれると思います。だからこそ、私たち職員はできることだけに目を奪われず、仲間一人ひとりの障害や発達、生活歴などの理解を通じて抱えている困りごとや得意なことなどをきちんと理解できるそのひとりになって、これからの人生に寄り添っていきたいと思います。

白岡市障害者デイサービスセンター
施設長　松浦　禎洋